

## JISS所報

2013年9月1日発行・・・所報No.361

### 目次

スウェーデン研究連続講座第148回、第149回、第150回

**第148回**「スウェーデン障害者ケアの特色——私自身の経験から」Swedish Quality Care  
Mr.Emil Ostberg**第149回**「スウェーデン人と日本人の創造性について」東海大大学名誉教授 川崎  
一彦  
駐日スウェーデン大使 ラー  
ス・ヴァリア  
イケアジャパン人事本部長  
泉川玲香**第150回**「40年日本をスウェーデンに報道して——好奇心から始まって福島まで」ジャーナリスト  
Ms.Moneca.Braw

## 新シリーズ

スウェーデンのニッポン人(3)

藤川陽子 ムール

スウェーデン社会研究所 所報  
No.361 2013年9月1日発行発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所  
〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1  
株式会社科学新聞社内5階

## 連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7  
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596e-mail: [jiss12@nifty.com](mailto:jiss12@nifty.com)URL: <http://www.sweden-jiss.com/index.html>

発行人・編集責任者: 野崎俊一

Publisher&amp;Editor in Chief: Shunichi Nozaki

編集者: 久保田健司

Editor: Takeshi Kubota

148回スウェーデン社会研究講座  
「スウェーデン障害者ケアの特色—私自身の経験から」

Swedish Quality Care Mr.Emil Ostberg

視覚障害者のエミル・オストベリさんは七歳の時に視覚能力を失ったのにも拘わらず、ストックホルム大学を卒業、アメリカのオレゴン大学では日本語の資格を獲得、長野のパラリンピックをきっかけに早稲田大学に留学しました。パラリンピックには3回出場して2002年のソートレークではクロスカントリーの種目で銀と銅メダルに輝きました。エミルさんはこのようにスウェーデン、アメリカ、日本と、その国々の障害者ケアを自ら体験してきました。この講演ではその経験をもとにして、「スウェーデンでのケアが他の国比べて、どんな特色があるのか」を紹介して下さいます。(案内文から)

(日本語で講演)

スウェーデンの障害者福祉についてお話致します。私自身もスウェーデン、アメリカ、日本に住んだことがありますのでその点についてもスウェーデンの特徴に触れていきます。まず最初に、簡単に自己紹介から。私はストックホルム生まれ。7歳のころから視覚障害者になり、視力は健常者に比べると5%しかない。歩くのは別に問題ないが、読み・書きは非常に難しく、点字、コンピューターが読み上げるソフト、また拡大ソフトを使って勉強しています。そして私が勤めている会社のお客さんからの質問では、「じゃ、あなたはどれくらい見えて、勉強しているんですか」と。この質問に対し、私は「どれくらい見えているのか分からないので比べられないのです」と答えています。

さて、7歳のころから視覚障害者になりましたが、スウェーデンの小・中・高校は統合教育のため、私は一般の普通学校に通っていました。スウェーデンでは1980年代初めのころは障害者のためのコンピューターとかはあまり普及していなかった。このため、先生たちはカセットテープで録音したりするなどしてその時代は大変だった。しかし、私が大学生になった1992年ごろになると、IT機能がどんどん進み、障害者にとってIT機能技術は喜ばしいものでした。つまり、自分で勉強したいことがあれば、自分でコンピューターを使いながら出来る。このことは全部自分で出来るということで、すごく楽しくて、良いことでした。ストックホルム大学では2年間勉強している中で外国語を学びたいと思いました。その外国語と言えば、英語がやはり一番大事じゃないですか。もっとも子どもの頃、英語はあまり得意ではなかったのですが、留学したくて一生懸命に学び、アメリカは1年間のつもりでオレゴン大学で学びました。この1年間のつもりが3年になり、専攻も日本語になりました。この中で日本文化に興味を持ちました。実はスウェーデン時代の私は日本の事は全く知らず、国内の学校での小・中学校においても日本の事はほとんど紹介されていなかったのです。しかし、オレゴン大学は西海岸にあり、アメリカ本土から見るとアジアに近い位置にあったし、当時は日本の学生もいっぱいいた。

オレゴン大学の日本語の先生はとても素晴らしい人でした。その先生は私をサポートしてくださり、そのおかげもあって私は早稲田大学に奨学金支援で1年間の勉強ができました。この東京生活の1年間はすばらしい体験になりました。何がすばらしかったと言えば、東京にはいろんな国からの人がいて、この人たちとの出会いが出来、またいろんな体験が出来たことです。その一つがスポーツでした。5歳のころから始めたのがクロスカントリースキー。パラリンピックには3回参加し、東京の時は長野パラリンピックでしたが、この時は日本の代表者たちと合同で長野県・野沢温泉で一緒に1か月の合宿をしたことはすばらしい体験になりました。もっともこのため、早稲田大学の冬学期の成績はいい成績ではありませんでしたが・・・

さて、福祉施設の充実度について触れましょう。スウェーデンといえば「福祉が充実している」と言われますが、ストックホルム市は東京に比べれば人口数も少なく小さな街です。この街中には地下鉄やバスが走っています。私はストックホルムに住んでいて街中の地下鉄は「使いづらい路線」だと思っていました。この話はあとで改めてお話し



す。

これからは私が勤めている会社、SQCに触れます。本社はストックホルム。私の仕事内容は日本からの福祉問題の視察・研修に来られる人たちについての研修プログラムを作成し、その責任者です。毎年約400人から500の方が研修に訪れる際に色々な施設訪問のサポートや高齢者・障害者施設経営者らのコンサルティング、あるいは音楽療法などを提供しています。そして昨年からはスカイプを使ったセミナーも取り入れています。

ここで話は変わりますが、スウェーデンの基礎知識を把握しておいてください。人口は約940万人。平均寿命は世界2位か3位。障害者の比率は全てが登録しているわけではないので数字ははっきりしませんが、数字的には10-15%。失業率は8%とやや高く、GDPランキングは14位。それにこれは皆知っているかもしれないけれど、税金は高く、世界では2位。1番高い国はデンマークです。

さて障害者と福祉について話を進めましょう。国民の考え方がだいぶ、昔に比べて意識が変わってきた。30年前の例ですと、対象者は大きな施設に住んでいて、障害者は何かをするという義務が負わされていなかった。だが、今の考え方は「あなたは障害者かもしれないけれど、あなたが負う義務もある。自分自身でも努力しないと良い生活が出来ない」と。つまり、それまで存在していた施設型から一般住宅に住むスタイルに移行しています。

私自身も国から色々な支援をしてもらっています。それは補助器具とかIT関連のソフト。これらは全部国からの援助によるものですが、このことによって私の場合は勉強が出来、また仕事が出来、そして税金もいっぱい払う。このことはつまり国から自立するということです。

データ的にみますと、30年前の病院ベット数は約10万床だったものが、今は約4分の1に減った。と言うことは、以前は精神病院がいっぱいあったし、障害者は大規模施設や病院型施設に收容される形で住んでいたが、現在は大きく様変わりしている。現在は従来の施設から一般住宅かグループホームに移住し、これらの人々を地域コミュニティが色々と支援し、医療的支援に加えてソーシャル的な支援の充実を図っています。

ではなぜこういう形になったのか。この陰にはやはり、障害者団体の存在があります。スウェーデンではこの種の団体はとても強いものがあります。この種の団体は30年前ほどからノーマライズ精神、つまり、「われわれは障害者かもしれないが、一般の人と同じ権利がある。一般の人と同じような生活が出来る権利があると考えている」と。このことから毎年のデモ活動ではこの団体は参加し、「スウェーデンはもっと障害者バリアフリーの社会になるように」と要求します。ですから、何か関連する新しい法律を作る時は必ず障害者団体とも相談します。これはこうした人たちの声的大事と思う由縁です。

次にスウェーデンにおける障害者福祉サービスの特徴について。これはアメリカや日本と違ってスウェーデンは税金で福祉をしているということです。と言うことは、保険システムではなく、みんな若い時から税金をいっぱい払っていて、その代わりに介護支援が必要な時には国は支援を提供する。例えば教育面で見ると大学までは無料だし、障害者福祉面では、グループホーム、デイセンター、パーソナルアシスタントなどのサービスを使うのは無料システム。

次に行政システムについて。まず国会があり、その傘下に県、290からなるコミュニティがある。役割として、国は法律を作成し、県は医療に責任を持ち、予算の8割は医療で、残りは公共交通と障害者の送迎サービス。また、病院、リハビリセンター、補助器具類の関連業務は県の仕事。ではコミュニティの役割はどんなことかと言いますと、予算の19%は高齢者福祉、障害者関連が11%、あとは子どもケア、高校までの教育支援予算です。

さて、スウェーデンでは障害者が生まれた場合の支援についてみてみましょう。この場合、不安感いっぱいでもどう対処して良いのか迷う保護者に対して、症例の説明から教育支援や自立のための情報提供を行います。ここで「ハビリ」「ハビリティ」用語の解釈と使い分けについてみてみましょう。

スウェーデンではリハビリとは言わず、ハビリティセンターが一般的。なぜか。リハビリは健常者が何かケガをしてリハビリしたら前の状態に戻るけれども、ハビリティの場合は元々、障害があっても健常者のような形に戻れない場合はハビリティの言葉を使っています。

教育の話になりますと、幼稚園、保育園はプリースクールと言うものがあり、そこでは障害者の子どもは健常者の子と一緒に going to school しています。それが可能にするため、障害を持つ児は幼稚園では特別な先生がその児につきまします。国や市からの金銭援助でそうした対象の児の支援が出来るシステムになっていますが、こうしたシステムは大切だと思います。と言うのは、健常者と障害を持つ児との一体感が必要だし、最初からこれが別々であれば、健常者は障害を持つ児の事をあまり理解できないし、障害を持つ児も逆に健常者の事が理解できない可能性が高い。こうしたことから幼稚園・保育園での統合教育は大切だと思います。しかし、小学校に段階になると、知的障害者は一般の学校には通学出来ない。その代わりに特別学校がある。期間は10年で、高校は4年間。教育内容は一般の学校とは違うが、その目的としては高校カリキュラムでは実社会で働けるレストラン業務とか庭師などあり、このための実習時間も26週間のケースも組み込まれています。この仕事ですが、スウェーデンにはいわゆる法定雇用率は無く、また障害者の雇用率は健常者に比べると失業率が高く、データとしては50%になっているため、大きな社会問題としてとらえられています。

スウェーデンでは障害者の職場支援にはどうしたシステムがあるかと言いますと、ひとつは国からの補助器具の提供。また、職場がバリアフリーになっていなければ、国は改修サービスなどの提供とか、給料も8割の支援がある。このため、雇用側から見れば国が8割を援助してくれ、かつ、障害者の従業員にアシスタントが必要とすれば、国側が

このアシスタント分の給料援助をする。このように手厚い支援目的は、障害者たちは一般の仕事が出来、この自立による収入と税の支払いをするという一連の好意は「幸せ」になるためのものであり、このことが結果的には国にとってモスト的に割安ということに結び付く。

このようにスウェーデンは福祉先進国と言われるが、まだまだ十分ではなく、決して完璧な社会とはいえない。もっと障害者の雇用を促進し、一般社会に受け入れてもらうための啓発も必要で、例えば、障害者がもっとテレビ番組に出演する機会を多くするなどの努力が望まれるところです。

障害者雇用を受け入れている企業にサルマールがあります。約3万人の従業員がおり、そのうちの6%が毎年一般企業に就職する実績をあげています。

さて、スウェーデンの福祉システムの特徴と言ったら、やっぱり重度の障害者のための支援はすごいと思います。それを支えている法律がLSS法。これまでも障害者支援の法律はありましたが、これは権利法のため、これまで十分な支援を受ける機会がなかった重度の障害者には朗報の法律とう受け入れられました。例えば、日常生活の中で買い物や散歩したいとすれば、そのアシストとして、パーソナルアシスタントを要請することが出来るなど、自立のための色々なサービスが受けられることが出来るようになりました。

この法律が対象者に該当するかどうかの判定は公的な認定判定員に委ねます。障害者のための交通の送迎タクシーの活用や家屋改修の資金援助や補助器具の支援も充実しており、特に先ほども触れました補助器具は世界1の普及率と言われるほどです。こうしたサービスの充実施設を作り、そこに対象となる人たちが住むコストに比べれば経費的には大きな割安になる。例えば、グループホームの場合だと1人当たりのコストは1か月でコミュニケーションの持ち出しは100万円かかるが、これを送迎サービスとか車椅子の補助器具の提供で賄えたとしたら、コスト的にはとても安上がりになる。

もう少し補助器具について話を進めます。私の場合もこの補助器具がなければ仕事ができない。また、色々な障害を持つ人にとっては補助器具がなければ自立ができない。車椅子の人は車イスとか電動車イスがなければ自分では動かすことができない。これにIT関係の補助器具、アイホンを使っている障害者がだいぶ増えてきている。特に認知機能障害がある人たちのためにそういうような器具が数多く出来ている。それを使うことによって障害を持つ人たちは自立出来るのです。先ほども病院のベット床がどんどん減ってきていると話しましたが、その一つの理由として、補助器具の普及があげられます。この補助器具を使うことによって障害を持つ人たちは病院型施設に住まなくても自分で自立が出来て自分で生活が出来ようになった。

確かに国は補助器具のための技術開発とか維持、支援のための費用は大変な額に上りましたが、人件費に比較してみますとかなりの割安になるのです。スウェーデンが開発した施設のひとつがグループホーム。多くの方は認知症ホームを訪問しているかもしれないけれど、障害者グループと高齢者ホームでは内容的にはだいぶ違う。例えば一般の住宅マンションの中にあるグループホーム。認知症の場合はひとつのグループ単位は9人ですが、障害者向けグループでは5、6人。一般の住宅の中に障害者向けのアパートがある。これはグループホームの中に1人1人が住み、その居住面積は約40㎡とかなりの広さ。この施設はトイレが広いし、このグループホームには職員がいて特別ケアをしています。また、重度の障害者が自分では言えない場合に備えて介護のノウハウが細かくプランとして記されている。

これは一例。モーニングコールは朝9時にノックしてください。そして5分待つたら部屋に入ってください。そして電気をつけて、コーヒーの準備をしてください。これは全ての介護職員が同じやり方をするようにするためのもの。その職員数は障害者の重度ステージによって違う。とても重度の場合は1対1だが、軽度の時は2対1か3対1の介護。これは障害者の重度差によってそれぞれ障害者たちが自立できるために対処しているのです。そしてこれとともにソフト面としては介護職員の知識の充実が求められるところです。

さて、日本の公共交通の地下鉄や街を歩いても点字ブロックが必ずあります。点字ブロックにはトイレの説明がある。スウェーデンではあまりない。階段もスウェーデンでは分かりにくく、転びやすい所もいっぱいある。来日して地下鉄を利用したが、すごいレベルにあるとびっくりした。私にとって天国。これは視覚障害者でなければ考えないかもしれないことですが・・・例えば、ホーム落下防止の防護柵があり、日本の地下鉄は使いやすくと実感しました。私は障害者ではないと感じるほどです。この点、スウェーデンは日本から学ぶことがいっぱいあるのではないかと思います。

また、アメリカにも良い点が色々あります。私がこの三つの国に住んでみてそれぞれその国の特徴があることは自覚していますが、日本とアメリカの国のサービス事業がかなり強い。銀行とか街に出かけたらサービス提供をしている店を見かけます。スウェーデンだと食品店に行ったらこのようなサービスは無く、自分でやらなければダメです。地下鉄のサービスも同じ。全部、自分でやらなければならない。その点、日本は良いので障害者にとっては過ごし易いのではないかと思います。

日本の将来についてですが、かなり明るいと思います。それは日本という国はバリアフリー化にしても高齢者施設などの充実度ピッチが高く、パラリンピックのレベルも長野の時代に比べると国の援助などもあって今ではスウェーデンよりレベルが高いのではないかと思います。このように将来的には日本はスウェーデンより進化していくのではないかと思います。

第149回スウェーデン研究講座  
「スウェーデン人と日本人の創造性について」

持続的な社会を創るには創造性が欠かせません。世界経済フォーラムやカナダの調査によると、創造性のインデックスでスウェーデンは世界のトップですが、日本は30位に甘んじています。この違いはどこからくるのでしょうか。今回の研究講座では、駐日スウェーデン大使のラース・ヴァリアさんを交えて、日本市場で飛躍的な発展を遂げているイケアジャパンの人事本部長、泉川玲香さん、日本とスウェーデンの学術交流の発展に長年貢献されてきた、東海大学名誉教授の川崎一彦さんにこの違いと将来の展望を話し合ってもらいます。(案内文からの抜粋)

鼎談のテーマは①今なぜ創造性か②スウェーデン人と日本人の創造性③創造性を如何に育むか(鼎談中の敬称は略)



川崎(写真右) 最初にそれぞれから今回のテーマについての見解を頂き、その後三人で鼎談を致します。まず私から。なぜ創造性が大切か、それからどうやって創造性を育成してきたかを話します。カナダ・トロント大学の調査データ(The Global Creativity)によると、スウェーデンはTechnologyのレベルが5、Talentは2、Toleranceが7、総合力は1位。また、北欧諸国もフィンランドが3位、デンマーク4位、ノルウェー7位と高い。これに対して日本は30位。この違いは何から出てくるのか。これは非常に興味あります。6年前のことですが、IKEAの社長さんは、こうおっしゃっている。

「イケアの社員には自分で解決することを要求する。何時もマニュアルがあるとは限らないが、日本人はそう考えて

いない人が多いようだ」。私は25年間、東海大の札幌キャンパスで教鞭をとってきたのですが、全ての科目で学生さんに到達して欲しい目標を創造性と自己効力感の二つに絞っておりました。その手法がグローバル。グローバルに考えてローカル地域で行動する。もちろん、グローバルと言っても世界は広いので、私の場合は北欧の事例研究を参考にして、そして地域を知ってもらい、創造性と自己効力感を育成する。こういうやり方であったわけですが、今日のテーマは創造性ということです。

私が学生さんに期待した二つの到達目標ですが、なぜ、創造性を到達目標の一つにしてきたかという私の理由ですが、時代は歴史的転換期にある。時代は狩猟、その後は1万年の農業時代。その後の産業革命、工業、物作りの時代に突入しました。私は1988年にストックホルムから札幌に移ってきたのですが、当時は「Japan is No.1」と言われた時代でした。しかし、今から見ると、No.1であったのは日本があくまで工業の時代。しかも自動車とか家電の一部など限られた業種だった。その間にスウェーデンを含めて先進国は企業の時代に突入していったと言えると思います。

その企業の時代とは、ひとつはスピード。変化のスピードも全然違う。もうひとつはスピードだけではなく、変化が量的ではなく、質的であるという大きな変化であると思います。これはアメリカの未来学者のレイクレスベルの本の事例からですが、この中で「21世紀の技術革新は20世紀の2万年分に相当する」と言っています。つまり、2013年という1年は20世紀の200年に相当する。いつも私が学生さんに聞いていたのですが、大学に4年間いるということは我々が大学に行っていた時代の800年に相当する。その間に何をやるかというのは大きな課題だったと思います。これは堺屋太一さんがおっしゃっている予言ですが、狩猟時代は血縁、農業時代は地縁、工業時代は社縁、そして今は好縁。つまり、何か一緒にやりたいとか、趣味があれば地縁も社縁も関係なく、こういう恵まれた時代にあるというわけです。

こういう時代に必要な教育は何かと言うことですが、これまでは必ず「答え」があった。しかも、答えはひとつしかなか

った。しかし、これからの時代はそもそも答えが有るのか無いのかも分からない。有るとしても答えはひとつだけではないかもしれない。そもそも問題は自分で見つけてくる必要がある。こういう時代は今日集まってきている皆さんは分かっているわけです。しかし、問題は学校教育がそういう状況でついていけないというのが問題だと思います。これから我々がやるべきことはコンピューターに出来ることはやらせて、コンピューターが出来ないことをやる必要がある。正解がない時代と言ってきましたが、AKBフォーティエイトの総合プロデューサーの秋元さんは「正解は自分の中にある」と。つまり、正解はひとつではなく、それぞれの主張が自分の心の中に正解を持っているという表現をされていました。

また、ピカソの言葉には「子どもは芸術家。大人になってもどうやって芸術家にとどまるかが問題」と言っています。また、メディアに登場した方は「僕が成功したのは日本で一切教育を受けなかったため。幼児期は好きな時に好きな絵を画くが、小学校に入ると勝手なことをしてはダメと言われ、創造性を潰される。だから日本人は大人になると誰も絵を画かない」。これでは困るわけです。まあ、そんな背景で、学生さんに到達して欲しい、つまり社会人として必要なもっとも重要なスキルという風に私は認識しています。その一つが創造性。実はヒントにしていたのはスウェーデンもそうなのですが、フィンランドも非常に参考にしていました。フィンランド教育のキーワードは企業家精神というのですが、「アイデアを行動に移す個人の能力」。ここで要求されていることは二つある。

まず他の国、他の人が持たないアイデアを持つこと。それと二つ目は、それを単にアイデアに終わらせずに行動、アクションに移すこと。この二つがフィンランドでは企業家精神と呼んでいて、これは大企業に勤めていても、公務員でも必要な資質と捉えています。私が目指してきた創造性と自己効力感と通じるところがあると思います。

これは本の情報を鵜呑みにする私が良く引き合いにする事例の一つですが、それは日経新聞の3年前のもの。日本航空の入社式の記事。ひとつは1986年で、会社側は自由な格好できてよろしいと。もう一枚の写真は2年前のもの。この二枚の写真を見比べてどう思いますか。詩人の金子みすずさんは昭和初期の詩人ですが、「みんな違って、みんないい」と言った訳ですね。しかし、この2年前の写真を見ていると、どうも最近の若い人は逆に「みんな同じで、みんな良い」と言っているような気がします。まあ、学問というのは、「問うことを学ぶ」と書くわけですが、少なくとも私が体験した高校までの学校教育を振り返ってみますと、他の人が考えた事を丸暗記する。テストと言えば、暗記力のテスト。こういうことをやらされてきた気がします。氷が融けるとある小学生は「春になる」と答える子がいる。これは日本の学校では正解にはならない。しかし、これらは大切にすべきだと思う。

#### バリア大使(日本語でトーク)

皆さんには私が大使であるということ忘れて一個人の考えであるという含みの上で聞いてください。創造性については政府の中にもあります。スウェーデン政府は創造性を持っている国だということを強調してくださいと言われる。そういうやり方はあまり創造性のないやり方であるとは思いますが(聴衆から笑い)。と言うのは、やはりもう少し、どうい風に紹介すればいいかと言うことを考えた方が良いのではないかと。

さて、創造性はやはり必要な時に出てくると思います。ですからこの国でもそういう創造性はある。特にそういう感性があると思います。これはひとつの例です。妻と一緒に都内のある博物館に行った。誰もいなかった。制服を着たガードマンだけがいました。私は入場券を二枚買ってガードマンに見せた。私は券を1人で二枚持っていたところ、ガードマンは「二人だから券はそれぞれ持ちなさい」と言いました。私は誰もいないの

に?そういうルールがあるのかと…。私から見れば、この行為は創造性の必要はないと思います。ですから、日本は創造性がないと時々言われますが、むしろ、そうではないと思います。しかし、この博物館の事例のように、時々、ルールがありすぎて、つまりルールがありすぎると創造性が出ない。

もうひとつの事例で比較しましょうか。スウェーデンで人気のあるスポーツはアイスホッケー。かなり国際的にも強いスポーツだと思いますが、そういうゲームをやっている時はどうしたら良いかという場面がある。それはゴール目指して1秒以内に非常に大切な決意をしなければならないことです。日本では色々な武道がありますね。例えば弓道。私もやったことがあります。ルールばかり。「動きはこう」、「呼吸のはやり方はこう」とか、そこには創造性は全くない。でもそれは悪いと言うことではむしろ言えないと思います。ただ、私から見れば必要ではないのです。

スウェーデンには徴兵制度がありました。そしてその新兵を対象とする森林訓練があります。これはどういうことをするかというと、食料持たずに森の中にナイフ、鉄砲、ロープを持参するだけで、食料は自分で見つけるというものです。このため、10人が1組になって食料をどうやって調達したらよいかと考えるわけです。それにはワナを作るなど色々な事を創造する。また、スウェーデンは発明の国とよく言われます。今、皆さんが座っておられるイスなどにもそこにも創造性が生み出した物があります。それはコンピューター関連部品。それは、マウスがそうですし、ペースメーカー、マイクロ部品などです。これらはみんな必要にかられて生まれた発明品です。だから、スウェーデン人といってい創造性があるとはいえないのです。ただ、このように必要な状態や場面が多かった。だからそういう発明が多かったと言えるのだと思います。どこの国の学生さんも聞きたがるひとつは、わが国の大学授業における先生と学生とのやり取りがあります。スウェーデンでは先生は学生さんに自分の考えを言いなさいと指導します。もし答えが出なければ



ば、学生さんに自分が納得するまで答えを導くための指導を受けています。

これは最後の事例です。戦争の時に祖父はアメリカに行き、戦後もアメリカに残ったが、手紙を寄せなかった。心配した留守家族が消息探しの資金を用意して関係機関に捜索を依頼した。けれども見つからなかった。そんな事情の中、私は初めてアメリカに行った時、祖父の関係者から「ニューヨークで探してみてください」と頼まれていたので、私が行動したのは電話帳から調べることでした。そしたら、祖父の名前があり、いました。ですから、最初、留守宅が依頼した事務所は変な探し方をしていたから見つからなかったのではないのでしょうか。もっとも、この事例は電話帳を調べるのが創造性だったのかどうかはわかりませんが、「発明は簡単に出る」と思います、よ。



泉川 イケアの経営方針の考え方は「家」が一番大事。そして「子ども」が一番大切ということなんだけれども、日本にイケアがやってきて27年。日本での状況を見ると、電車の中でこんな光景をたくさん見ることができます。日本人の男性の帰宅時間は午後9時、10時になってようやく身軽になる。スウェーデンでは午後4時ぐらいから5時にはほとんど帰宅しています。そこに何か創造力と時間というものに関連性が少しあるような気がします。イケアが快適な毎日をより多くの方々にお届けしたい、そして、もちろんそれをやるためにビジネス理念があり、また、私たちは人事のアイデアを持っています。今日は細かいところまではお伝え出来ませんが、成功するビジネスには夢が不可欠である。その夢の実現には人材が不可欠。という言葉の中にも何かクリエイティブのところがある。創造力、同じ表現ですが、イマジネーションには創造力がもしかしたら日本人の中には欠けているのかと感ずることがあります。そして「夢の実現には人材が不可欠」と言っているその人材たちは疲れ果てて電車の中で眠っています。そういう今の現実を何かもう少し見直してみる必要があるのかもしれない。

イケアがよく言われるのは、コワーカー(従業員)の成長がイケアを決める、と。1人のコワーカーが成功することがイケア自身の成長を発展させる。そのとおりだと思います。そしてどんな環境かといいますと、ダイバーシティ、そして機会を与える。そして、それは平等の機会が与えられる。そしてノータイム。むろん、フラットな組織といっても社長もいますし、部長もいますし、そういうことなんですが、気持ち的にフラットなんです。それが多分、イケアの環境の中でも、他のいわゆる日本の会社とは一線を画するのかもしれない。そしてコワーカーの可能性というものを常に発掘し、伸ばそうとします。減点法ではなく、加点法というところが大きなことだと思います。と言うことで、先ほどの環境の中で一番トップに挙げたダイバーシティ(多様な働き方)の対応性について話させていただきます。

イケアはコワーカーが1人1人が自分らしくおられること。それが大事だよ、と常に言っています。Be yourself、「あなたらしくいなさい」と言われます。私の中ではあなたらしくいなさいと言われたことがきくとイケアの中で自分らしく、自分の強い所、自分の得意な所を伸ばさせてもらって、それが今の私の成長に繋がっているということを実感します。それをより多くの従業員たちに感じてもらう。すると、そのハッピーな従業員たちはお客様になり、また、お客様はハッピーな従業員からハッピーなオーラーをもらうという流れが続いて行く———ということを想像しています。

ダイバーシティというと、たまたま今日の朝、東京駅近くのミニコンパレスでウーマンズインターナショナルネットワークがありました。海外からやってきた男女からダイバーシティの重要性を問う機会があった。そこでは、日本人のダイバーシティの表現する時は常にジェンダーのところに何時もいつてしまう。つまり、男性と女性というところにわりとフォーカスしてしまう。しかし、本当の意味のダイバーシティというのは、国籍もそうですし、身体能力も、ジェンダーも、ナショナルもそうです。第一次的要素がそこにあるとしたら第二次要素としては例えば、社会経済のステータスはどうか、組織としてはどうか、教育はどうか、ダイニングスタイル、スモーカーまたはノースモーカーなのかどうか、そして役職はどこにあるのか、性的嗜好は、さらに専門分野、宗教は、などなど、ダイバーシティには色んなファクターがある。しかし、日本では今の段階では年齢が、もしくは国籍が、そしてよく疑われるのが女性をどう活用するのか———という状況にあるのも、もしかして、これも日本人の創造力のなさに通じるのか。これらはマジョリティのなさなのか、まだ見えてこない。ダイバーシティの必要性は日本人には足りない。もちろん、何かやろうとした時にアプローチはありますが…。

こういう環境の中でイケアの女性マネジャーは43%に達していますが、日本の企業は11%。この数字を見た時にイケアにはこれまでお話ししたシステムがあるから増えたのか、それとも従業員の気持ちの中に創造力があり、これが創造性に結び付き、さらに、それがビジネスにプラスとなったのではないかと思います。このように私は10年前に入社し、そこで学んだことは今の自分には知りえなかった色々なこと、それは人生の大切さ、生きることの大切さ、その重みみたいなものを教えてもらったような気が致します。

「鼎談」

川崎 これから先ほど示しました三つのテーマ、①今なぜ創造性が必要なのか②スウェーデン人と日本人の創造性③どうやって創造性を育成していくのかについてもう少し詳しくお話を伺いたいです。まず泉川さんにお伺いしたい。イケアで10数年間仕事をされていてイケアで得たスウェーデン的な価値観が大変なものをもっと少し伺いたい。その創造性との関連があってもなくてもいいんですけども…。どのへんが特に得られた価値観と考えられていますか。

すか。

泉川 ちょうど、川崎先生の講演の中にもあったように、答えはひとつではないということを常に生活する会社の中で感じる。「そういう意見なんだね」とか、「なぜそう思うのだ」と。A、B、C、Dと意見が出てきた時もそれ自体に対してスウェーデンではなるほどと感じる。しかし、日本だと、AなのかBなのか、最終的な答えを出したくなるような、または出してしまおうと言う形になることが多かった。常にWHY、なぜなんだ、そして人の意見の違いと言うものをすごく受け入れている。そこはまさに私の中では答えは画一的ではない。ひとつではないと言うことはイコール、そこには1人1人の創造力であったり、創造性があったりなどが反映出来ることがある。そこがすごいと思いました。

川崎 バリア大使は東京の前に韓国で5年間大使として赴任されており、先週も札幌で韓国と日本の創造性を含めたお話をされています。そこで、そのことを聞きたいと思っていたのですが、これについていかがですか。スウェーデン人と比べてと言うこともそうですけれど、韓国と日本の創造性というのはどういう風にお考えですか。

バリア大使 難しいけれど…。韓国はもちろん創造性があると思います。まあ、日本もそうです。しかし、はっきり韓国に有るけど、日本にはあまり無いと言うことはやはり、自分が考えていることを簡単に表わすと言うことだと思います。私の韓国での経験ですけれど、韓国人は反対するとやっぱり反対する。と言って、学校は別ですけれど、日本だとこの場合は多分失礼な話になりますから、自分が考えていることをあんまり言いたくないと言う状態があると思います。それは別によいとか悪いとかは別にして、やはり、そういう自分は反対の声を出してもよいと言う考えからやはり創造性が簡単に出てくると思います。ですから、日本社会では自分に対して色々なそういうリミットを開放されていいんじゃないかと思っています。まあ、あまり答えにならなれないかと思いますが…。

川崎 もうひとつ。先ほどの話で創造性は必要な時に出てくるという話がありました。ね。そうすると、どうしても必要性を作るか、どういうふうに必要な性を見つけるかというところが課題になると思います。それはいかがですか。

バリア大使 それはどういうことかと言いますと、やはり、創造性を使わないとか、もし、良いことを発見しないと大変なことになるということだと思います。

川崎 なぜ創造性が必要なのかということを知っているんですが、泉川さんに伺いたいのは、売上高でも利益でも世界で業界トップな訳なんですけど、その創造性について先ほどの言葉、Be yourself。これが実際に利益に繋がっているから説得力がある言葉だと思います。もう少し具体的に伺えるとありがたいのですが…

泉川 「Be yourself」、たぶん、利益にちゃんと繋がっている例とかお金に反映しているかということ是非常に難しい問題です。ただ、ダイバーシティがちゃんとしている会社は無い会社に比べて60%以上の利益が良いということを読みものでみますと、果たして本当にそうなのか…と難しいところがあるような気がします。ただ、ひとつの例で言いますと、Be yourselfと言うより、むしろダイバーシティのところ、昨年位まで私は人事担当ですから、これは4年前の事ですが、フードレストラン担当のところはどうしても男性マネジャーが多くて、もう少しダイバーシティして欲しいなあ。なぜならばイケアに来られるお客さんの65%は女性なので、もっと女性の意見を反映されるような女性がいてもよいのではないかと。言うこともあって4年かかってようやく40%くらいになってきました。そうすると、メニューはマネジャーに女性が入ってくることによって、従業員の声をもっと聞こうとか、お客さんに直接声を聞いてみようとか。今まで男性がこれだとマージンがとか、原価率などの絡みでメニューとなっていた。それが今度はそこにすごくソフトな要素が入ってきて、メニューに彩りがあるとか、もっと美味しそうじゃないのとか、小さくするともっと楽しんで食べるのではないかなど、そういうことで売上高が非常にアップしました。つまり、ダイバーシティして違った観点でモノ、意見、意識を変えることが創造力が働いていくことが創造性に強く繋がっていく例は実際にあると思います。

川崎 イケアの内情と言いますか、専門用語ですが、フードと言うのは食品だけではなく、レストラン部門と言うことですね。食品の販売もフードですか。

泉川 そうです。

川崎 テーマの二つ目と三つめについて、さらにお二人に伺いたい。例えば、バリア大使からは学校でスウェーデンでは自分で考えさせる。私も子どもからよく教えられているのですが、自分で考えて、自分で判断して、自分で行動しなさいとスウェーデンでは学校では誰でもそういうことを言います。

バリア大使 テレビを見ると、日本の番組がたくさんありますが、チャリティシュ②になっている。自分で考えて参加している人も勇気を持って「もうやめますから」と言えば良いと思います。日本の方はもっと自分の考えていることを自分で表わすこと。もちろん、失礼なことを言う必要はないと思います。ただ、別の考えがあるなどもっとはっきり言った方が良いと思います。繰り返しますが、私はスウェーデンの代表をしています。今夜の(発言)は別ですから(聴衆から笑い)。

泉川 大使がおっしゃった通りだと思います。私は日本人だから反対はしません。イケアでこんなことを学んだことかも知れませんが、朝、社長から言われて、「今日は何かミスチックしたかい」と。ミスチックと言いますが、間違うことを恐れないということをすごく学びました。すごく楽になる。ああ、間違ってもいいとか、今、大使のおっしゃった自分は違うと思うんだよとか、。つまり、違うといえるとか、それは間違いを恐れないということと繋がっているような気がします。日々の中であまりそういう間違いとか間違いじゃないかとかいうことを考えないでいる。やはりBe yourself という感じですよ。

バリア大使 日本の社会ではよくグループ社会といわれています。それはそうだと思いますが、ひとつの大きなグループよりも、その色んな競争をしているグループのグループ社会だと思います。そしてグループの中のトップがいて、内容としてはグループとグループ間の内容はかなり違っていると思います。そういう多様性が日本には有るとおもいます。しかし、グループの中のやり方は皆よく似ていると思います。グループ社会とグループの無い社会の違いの中には色んな意味があると思います。

川崎 お二人の考えが似てすぎて…。もう少し違っていれば面白いと思ったのですが、実は私も全くの同感。例えば、自分の考えることをどんどん言いなさいとの大使の考えはそのとおりだと思います。そのためには自分の意見がある、考えが有ることが前提ですね。そもそも日本の学校ではこれまでは残念ながら自分の意見を言うよりも先生の言うことを100%聞きなさい。教科書のあることを100%暗記しなさい。そういうような教育が中心だったわけですね。先ほど、正解が自分の心の中に無ければ、そもそも自分の意見を言うことが出来ない。それから泉川さんの完璧を目指すな、ミスティブが許される、減点主義ではなしに加点主義と言うのは、おそらく日本社会にとってこれから絶対に大切なポイントではないかと思っています。

---

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved

## 第150回スウェーデン研究講座

## 「40年間日本をスウェーデンに報道して——好奇心から始まって福島まで」

ジャーナリスト Ms. Monica Braw

モニカ・ブラウさんはスウェーデンの有力新聞の特派員として長年、東京に滞在した経験を生き、帰国後もずっと日本に関する報道を続けています。そのジャンルは日本の歴史から、日韓、日中、日米関係など政治問題、夏目漱石をはじめとする文学、日本の女性像と極めて多岐にわたります。20冊以上の著作もあり、モニカさん以上の日本通をスウェーデンで見つけることは難しいでしょう。この講演の内容は「有名なスウェーデン人ジャーナリストの目から見た日本」と言えます。私たち日本人が気がつかない日本の形が見えるかもしれません。(案内文から)

**プロフィール** 1945年スウェーデン生まれ。ルンド大学卒業後ジャーナリストとして仕事を始め、1969年から計6年、フィンランド国営放送の特派員として日本に。その間、アジア各国やアメリカ、オーストラリアにも滞在し、様々な番組を制作。母国の国営放送に勤務するなどした後の1984年から9年間、スウェーデンの新聞社スヴェンスターグブスデット極東特派員として再び日本に。スウェーデンにおける対日理解に功績があったとして旭日双光章を受ける。(編集部注\* 著書「検閲—原爆報道どう禁じられたのか」時事通信社の著者案内文からの抜粋)

(英語通訳つき)

私は1969年から一年間滞在し、もっと日本の事を知りたいと思い、73年から78年、83年から93年にもいて、その後も日本に関する報道プロジェクトや資料集めに毎年のように来日しています。今日の話は日本について私自身が学び、教えられたことについて、もっと広い意味でスウェーデンの新聞がいかに日本をどういう国として報道してきたか、当時のスクラップをもとに進めていきます。

この記事スクラップは、まだ、私がいわゆるかけだし記者の頃にスウェーデンに送ったものです。スウェーデン人や編集長には、日本という国がどんなにエキゾチックで、奇妙に映ったかの一例です。見出しは「犬が風評に抗議しています」。僕(犬の事)を見て、イギリスにいた時よりここ(日本)にいる方が幸せだよ。この話の背景には当時、輸入されていた血統書付きの犬たちが日本ではどういう扱いを受けているかの噂がイギリスのゴシップ紙で取り沙汰されていたものなのですが、これに対して私が書いた記事でした。

次は「死ぬ覚悟あり 決死隊が佐藤首相の行方を阻む」。この見出しは当時の佐藤栄作首相が沖縄返還交渉のためにアメリカに出かけようとした時のものです。この時、左翼の過激派が逮捕され、学生1人が命を落としました。ここでもスウェーデン人の興味の対象は沖縄の返還問題ではなく、もっぱら日本の左翼の行動であって、過激派の行動はそれからも続いていました。「これが日本の赤軍派だ」。イスラエルのテルアビブで起きた大量殺人の背景の説明からオランダでの大使館占拠、そして東京での爆弾事件と、当時は赤軍派に関するどんなニュースもスウェーデンのみならず、世界各国で報道され、分析されていました。それともうひとつよく報道されていたのは、環境問題でした。見出しは「今後人々の唯一の大きな望み。太陽と青い空を見たい」。これは日本経済の奇跡的成功の裏にあった川崎市の公害に関する記事でした。

さて、私は広島訪問によって人生に一番大きな影響を受けました。私はアメリカが原爆投下に関する資料、文書も検閲していることを題材として博士論文を書きました。広島と長崎には何度も足を運びましたし、多くの被爆者の方々にもお会いしました。毎年八月六日には核兵器や原子力に関する記事をしていましたし、今年も原子力漫画といわれる本について書くことになると思います。例えば、「福島の実実」というものです。ここにある記事ですが、原爆投下の25年後に広島のある若い女性を取材したもので、この女性は原爆投下の数ヵ月後に生まれたのですが、原爆の後遺症などを心配していないということが分かりました。



日本の報道を通じて私が伝えたかったのは、日本人の普通の生活であり、時には私は自分の経験を記事にしました。この見出しは「東京の人間ジャングルでオアシスを発見」。日本人の夢はマイホームを持つこと。誰も郊外を離れる必要はない。お金がそこにあるから。当時、私は夫と都下の下北沢に住んでおり、その下北沢の1970年代はとても閑静な所でした。われわれ、当時は外国人といえば近所では唯一の外国人ということよく知られていました。

もうひとつ、日本の生活についてのうち、日本の家に住むということについてですが、この記事は「凍える寒さを逃れるための日本の芸術とも呼べる懐炉とアンカ」を紹介したものです。全体を温めるのではなく、1人1人が温まるやり方。スウェーデンで暮らすわれわれとまるで違う発想による解決法を説明しています。

世界的に有名なボクサーのモハメド・アリ。彼がフィリピンで試合をした時、彼を取材する機会があり、後に日本を訪れてプロレスラーのアントニオ・猪木とも風変わりな試合をし、私は猪木にインタビューすることができました。彼はとても人のよさそうな思慮深い男性で、プロレスラーと思えば描くとはかけ離れた人物でした。

「世界の船舶の半数を日本が受注」。日本がヨーロッパの生産需要を圧迫。これはスウェーデン人にとっては本当に死活問題で、その交渉たるや大変厳しいものでした。私の故郷であるマルメがかつてはこの造船で栄えたが、今は廃れてしまいました。しかし、あとあとになって多くの日本の造船業界も同じ道になりましたが・・・。

一番印象深い取材は田中角栄さんです。このインタビューはとても貴重なものだったので、後になって日本の雑誌にも紹介されました。見出しは「田中首相 日本の開発を決めるのは私だ」。色々なことを伺った中で、とりわけ、このことは印象的でした。自分が権力を失っても、また、死んでしまっても心配はない。それは既に川に稚魚を放流してあるからだと思いました。田中さんの当時の若いころというべき小沢一郎氏はまだ健在ですし、執務室で田中さんは結婚式に出席するのでモーニング姿でこう語りました。「結婚式に出席するということは後々、この二人の面倒を見ることということです」と。家族にたくさんのお子がおれば、その中の1人ぐらいは出来の悪い奴もいるものだ。しかし、それでもその家族が幸せになれるように、出来る限りのことをしてやる。家族のためと団結することは当り前のことで、これが日本人の考え方というものです」と。そしてこの田中角栄さんの取材を通じて私は日本の政治というものをより深く理解するようになりました。

1980年のバブル時代。歓喜に沸く東京証券所の写真がよく掲載されました。それらがすごく魅力的だったのは、トレーダーたちの手信号があったからでしたが、残念ながら1984年に取引所はコンピュータ化されてしまいました。コンピュータ取引は効果的かもしれませんが、視覚的には以前ほどエキゾチックではなくなっていました、ね。

スウェーデンの日刊紙には日本の経済、貿易、企業について多くの記事を書きました。あるシリーズでは重要な産業界のトップを取材しました。私はソニーの創始者である盛田昭夫さんとそのパートナー井深大さんにも感銘を受けました。ソニーは伝統にとられない会社で、まあ、当時はそうだと思いますが、井深さんが会社の作業着を着て取材に現れたのにも驚きました。また、ウォークマンのような製品の成功はとても世界を驚かせましたが、盛田社長がある時、次のように言いました。「音楽を1人で自分の頭の中だけ聴くなんて馬鹿げた発想。私自身は信じられませんでしたよ。実際に自分で試してみるまではね」と。また、井深さんは日本の経済的な傾向には満足せず、日本の発展を危惧している。「日本は心の問題を忘れてしまったのではないか」と語っていました。

もう1人の興味深い産業界のリーダーは稲森和夫さんです。今、JAL再建の救世主となっています。しかし、JAL再建の見出しになっているように深くかかわった人ですが、彼も型破りのやり方が受け入れられていませんでした。京セラは大きな会社ではありましたが、最大手では一番成功している会社ではありませんでした。私は稲森さんが必要とされ、またもてはやされている現状は今や日本が変わってしまったのか、それとも稲森さん自身が変わってしまったのか分かりません。

大きなニュースも、また悲しいニュースもありました。最大のニュースのひとつにJALの墜落事故。500人余の人が亡くなりました。私は東京以外の地方について報道することは重要だと何時も考えていました。佐渡島には鼓という字に童を書いて「鼓童」という太鼓芸能集団があり、世界にもその名前が知れ渡るようになっていましたが、彼らの地元での生活は厳しい稽古のみならず、彼らの営むいわゆる緑の中での生活は、当時、多くのスウェーデン人の興味を持つ話題でした。

深刻な題材の中には子どもの生活やいじめ問題もありました。この見出しは「14才の政治、いじめの標的に」。いじめによる子どもの自殺、1985年のケースです。非難の矛先は教員や保護者に向けられましたが、われわれが思っているよりずっと以前からこの問題を取り上げていたのです。

私が所属していた新聞社はストックホルムに本社があるスヴェンスタグブスデット。私は会社の同僚とともにある年の紙面には日本の経済目標とか日本の大特集を組みました。特派員としてはひとつのプロジェクトに一週間も集中出来ることは珍しいことなものです。毎日の仕事では全く違った題材から題材へと身を投じているわけですから。

日本における女性の地位の問題もよく登場します。1971年には友人と京都でこの題材の本を出版しました。これは社会党党首だった土井たかこさん取材した時もわくわくしました。ここにある見出しは「土井たかこが男性世界に日本に革命を起こす。政治に非婚の女性」。ご存じでしょうが、記事を書く私のようなジャーナリストは見出しを決めることができないのです。私にとって土井さんは結婚していないことは重要ではなかったのですが、彼女は取材中にとりわけ環境への関心を語っていました。私は彼女が憲法に関する教授だったことを知っていましたから、憲法第9条を変えることは大きな間違いであると言っていました。そして私はパチンコが大好きだということも包みみかずに語っ

てくれました。

1987年10月の見出しのひとつ。「日本の対外投資 過去最大 日本は世界1の債権国に」。しかし、株価は最安値になりましたが、当時の宮沢首相は、日本経済は健全であると言っていました。一方、日本の労働組合が、お金、すなわち、高い給料だけでは充分ではないことを考え始め、こんな見出しが出ました。「生活の質をもっとよくする」というキャンペーン。心地よい生活のために家族の幸せを中心にしたヨーロッパ、アメリカと同等の生活水準をというもので、これが新たな目標とされました。

1995年にはオウム教団の施設を訪ねました。この時は既に解散させられていましたが、それでも若い男性がヘルメットをかぶって座っていました。その見出しは「ヘルメットは教祖のノート 彼自身をつなぐもの」。彼は全く信じて疑わなかった。

そして作家、村上春樹がスウェーデンで注目される存在となり、この見出しでは「不思議な国 日本のハードボイル作家 今日、村上春樹の本は全て発売と同時にスウェーデン語に訳されています」。

「北朝鮮が娘を盗んだ」。拉致されたことが判明した後、私はこの問題を再三にわたって記事にしました。

東北大震災と福島事故の後、その大惨事について様々な視点から書きました。その視点のひとつは「死」。これが日本ではどう捉えられているかという点です。見出しは「日本では遺体捜索が続行 埋葬されていない遺体の魂は自宅で安らぎを得られずにさ迷い続けると信じられている」。

時代はニュース記事ではカバーできないような広がりや深みを持った話題に立ち入ってきました。例えば、ポーランド人の博士論文に関するおおがかりな評論になっていて、内容は【葛飾北斎】。当時の日本人が自国を新たな視点から見られるように、北斎が版画の中各地の風景をいかに描いたかという題材でした。そして今ではスヴェンスカダグブスデット紙が平家物語に関する私の記事を掲載してくれるようになりました。私の今までの長年にわたる報道が歴史における日本における日本に関する興味、関心を引き出すのに役だっているのではないかと考えています。実際、2010年には全ての時代を網羅した日本の歴史についての本を出版しました。題名は【今後の国】。一年で完売しました。そして今年には光明皇后から美空ひばりまで九人の女性に関しての本も出版しました。このように、これからの年月を通じて私はたくさんを学んできました。これと同時に、私もスウェーデンにいる読者が日本に関する知識を深められたのではないかと考えています。私が日本に関する知識を広めたという功勞に対して2011年には、日本政府から旭日勲章を頂けたことをとても光榮に思います。

## 新シリーズ

## 「スウェーデンのニッポン人」(3)

藤川陽子

## 「さくらコース」

(藤川陽子 ムール ふじかわようこ・敬称略)

プロフィール 1937年生まれ。1973年渡瑞。音楽教師、合唱指導。趣味はクラシック音楽鑑賞。クラシックな物、建築、複層品などを見ること。

編集部から 今回は1970年代に渡瑞され、「スウェーデンのニッポン人」の本に掲載されている10人の中から藤川さんの寄稿文を転載しました。なお、この本を編集され、ノルディック出版のレグランド塚口淑子さんは昨年お亡くなりになりました。冥福をお祈りいたします。

「私は大きくなったら英語を勉強して外国に行きたいです」、と十歳の私は胸をはって大きな声でそう言ったそうです。将来の夢という授業で一人ずつが自分の夢を語ったときに。

自分では全く覚えていなかったのに、つい最近同級生からそのことを聞かされたときに私はびっくりしました。今、私がスウェーデンに住んでいるという芽はそんなに小さい頃から息づいていたのです。

その頃の私は歌うのが大好きでずっと音楽を続けていきたいということ、夢というより心に決めていました。その気持ちは変わることなく、私は音楽の先生の道を選び、小、中学の音楽専科教師になりました。初めて仕事に就いた時、私は皆に音楽の喜びを教える役割をしたいと強く思ったことを今思い出します。

この教師生活の真つ只中で、今思えば私をスウェーデンに住まわせるきっかけになったことが起きました。それは日本と外国の大学生の交流をはかる使節団の指導者募集の記事を新聞で読んだことです。音楽指導者として外国に行きたいと強く願う私はそれに応募しました。そして採用され、私の初めての外国旅行が1967年に実現したので

です。ヨーロッパの各国を訪れた中で私の心に一番強い印象を与えたのが北欧でした。そのゆったりとした落ち着きと穏やかな美しさが、私の心を捉えました。そして帰国後、直ぐに北欧文化協会に入りました。その会で北欧音楽の研究に取り組んでいた大東省三先生に出会い、先生の許で北欧の合唱音楽を学び、私は更に北欧に近づいたのです。

1973年に私はついにスウェーデンに移り住みました。その当時のスウェーデンは静かで人影が少なく周りに本当に人が住んでいるのであろうか、私は地の果てまで来てしまったのだろうかとも心細い心境でした。外を歩くと日本人が珍しくてふり返られたり、立ち止まって上から下まで眺められたりしました。でも月日がたつにつれて親切な優しい人が沢山いるということが分かってきました。私は一度も人種差別の目に会ったことがありません。言葉のできない私を理解しようと辛抱強く付き合ってくれた何人もの人達を思い出します。

スウェーデン生活にも大分慣れた1975年に、ふとしたきっかけでわずか四人の「さくらコーラス」がスタートし、翌年には八人に増えて、南劇場付属ホールで初舞台をふみました。

日本語のわからないスウェーデン人に内容を伝える大きな絵巻を作り歌詞に従って広げていったり、花嫁の歌では一人が花嫁姿になって出演したりしました。客席は満員ではなかったけれども、当時、テレビで大活躍の著名人レナルト・スワン(Lennart Swanh)氏がいらして、彼のテレビ番組に私達が出演することになりました。何と素晴らしいスタートかと、一同大喜びしたのですが・・・。

テレビ出演の日がきて私たちは朝早くからスタジオ入りしました。私達にまず課せられたのは、持ち歌を次から次へと歌うことで、お昼まで歌ってやっと選ばれたのが日本古謡さくらと盆踊りの花笠音頭でした。暑いスタジオで待つこと数時間でやっと出番になったときには残る力をしぼり出すのがやっと。もうテレビはこりごりというのが私達の本音の感想でした。

山田耕作の作曲になる赤とんぼは、国境を越えて人々の心に感動を呼び起こします。私達がダーナラ地方の著名

な作曲家アルフペーン(Hugo Alfvén)博物館でこの赤とんぼを歌ったときに、観客の何人かが涙を流しながら聞いているのが目に入りました。私達も歌いながら心を大きく揺さぶられながら、歌の後でお互いに涙をこぼしながら抱き合いました。見知らぬ同士が歌の力でこんな身近になれるのはすごいと思います。

また、日本に住んだことがあるアメリカの若い男性が亡くなられて、お母様からお葬式で赤とんぼを歌ってほしいと望まれました。私達は深く悲しむご親族の前で声もとぎれがちにこの歌を歌ったのでした。数年前にお母様も亡くなられて、私達は再び涙ながらに赤とんぼを歌いました。

ストックホルムの街の真ん中にアル王立公園(Kungsträdgården)には、日本から贈られたという桜の木が植えられて美しい並木を作っています。2003年からここで桜祭りが行われるようになりました。私達もこのイベントの一環として和服姿で日本の歌を歌っています。今年で九年目になりますが、寒くて震えながら歌うときと、春の陽を浴びて満開の桜の木から花びらが降り注ぐ中で歌うときと、その年の気候によって違いますが毎年大勢の人が集まり、とてもにぎやかなお祭りになります。今年は特に若い人が沢山来てくれたので嬉しいと思いました。

2011年3月11日に東日本で大変な大震災が起き、こちらに住む私達にも大きな衝撃を与えました。日本人会をはじめ多くの団体が様々な機会に援助の手をさしのべる中で一年が過ぎ2012年3月11日にグスタフアドルフ教会で祈りの音楽ミサがもたれました。私達も皆様のご冥福を祈り、災害地の立ち直る力を願って歌わせて貰いました。胸が痛むと同時に感動的なミサとなり私達の心に深く刻まれました。

「さくらコーラス」は今年で38年目を迎えました。私達は様々な場を通してこの国に住む人々と交流し日本を紹介しています。老人ホーム、教会、博物館、会社の行事など、国会でも歌ったことがあります。これは私達の力だけではとてもできなかったことで、スウェーデンに住む移民達の母国文化を積極的に守るという政策が助けてくれたことを、ここで伝えたいと思います。

コーラスがスタートした当時には移民文化センターという組織があり、そこが発表の場を提供し、場合によっては補助金も出してくれました。また、数々の成人学習コースを国が援助し私達にも練習場を全く無料で使わせてくれます。「さくらコーラス」は日本人会に属して活動していますが、この日本人会にも国から補助金が出ています。

コーラスのメンバーも四人から二十人と増えました。年齢層は30代から70代、異なる職業の例えば看護師、先生、女優、画家、年金生活者などの人達で構成されています。それぞれ生活も経験も違う人達ですが、目的はひとつ。皆で日本の歌を歌って練習の後でお茶を飲みながら日本語でおしゃべり、こんな楽しいことはありません。身寄りが近くにいない私達にとっては最も頼りになる仲間達です。

私が初心時に考えた音楽を教えたいということは、今ふり返ってみると私自身が喜びを貰い、生きる活力を貰ってきたことに気がつきます。歌いたい人がいるかぎり、そして力が続かぎり、私は「さくらコーラス」と一緒に歌っていきたいと思っています。